

## 略歴書

# 中埜 良昭 (なかの よしあき)

東京大学生産技術研究所 教授

工学博士 一級建築士



【専攻分野】 建築耐震構造学

### 【本会活動】

理事 (学術担当) : 2011 年 6 月～2013 年 5 月

副会長 : 2015 年 6 月～2017 年 5 月

17WCEE 招致委員会／運営委員会 副委員長 : 2013 年～

### 【略歴】

1984 年 3 月 東京大学工学部建築学科卒業

1986 年 3 月 東京大学工学系研究科建築学専攻 修士課程修了

1989 年 3 月 東京大学工学系研究科建築学専攻 博士課程修了 (工博)

1989 年 4 月 東京大学生産技術研究所 講師

1992 年 3 月 同 助教授

2002 年 3 月 テキサス大学 (オースティン校) Visiting Researcher (～2003 年 1 月)

2005 年 8 月 同 教授 現在に至る

2009 年 4 月 同 副所長 (～2011 年 3 月)

2012 年 4 月 同 所長 (～2015 年 3 月)

### 【委員会活動 (直近 5 年間)】

IAEE Vice President (2017 年 5 月～) および National Delegate (2014 年 8 月～) / 日本学術会議連  
携会員 (～2017 年 9 月) / (一社) 日本建築学会理事 (総務担当) (2015 年 6 月～2017 年 5 月),  
文教施設小委員会主査 (2018 年 3 月～), Japan Architectural Review Associate Editor (2017 年 6 月  
～) / 国土交通省社会資本整備審議会委員 (2017 年 2 月～) / 文部科学省地震調査研究推進本部  
専門委員 (2009 年 4 月～) / (一財) 日本建築防災協会理事 (2011 年 6 月～), 既存建物耐震診  
断委員会副委員長 (2015 年 4 月～) / 既存建築物耐震判定・評価等委員会委員長 (静岡県) およ  
び副委員長 (島根県, 大田区, (一財) 日本建築設備・昇降機センター) ほか

### 【著書および主要論文 (代表的なもの 10 編以内)】

- 1) (津波) Tatsuya Asai, Gary K. Chock, Yoshiaki Nakano, Ian N. Robertson: Tsunami Resilient Designs of Vertical Evacuation Buildings in Japan and the USA, Proceedings of the Twenty-eighth (2018) International Ocean and Polar Engineering Conference, Sapporo, Japan, June 10-15, 2018
- 2) (RC 柱) Yong Yang, Kazuto Matsukawa, Ho Choi, Yoshiaki Nakano: Experimental Study on the Residual Axial Load-Carrying Capacity of Shear-Damaged RC Columns, Journal of Advanced Concrete Technology, Vol. 16, Issue 2, pp. 97-109, Japan Concrete Institute, 2018.2.
- 3) (熊本地震) M. Sarrafzadeh, K.J. Elwood, R. Dhakal, H. Ferner, D. Pettinga, M. Stannard, M. Maeda, Y.

- Nakano, T. Mukai and T. Koike: PERFORMANCE OF BUILDINGS IN THE 2016 KUMAMOTO EARTHQUAKE AND SEISMIC DESIGN IN JAPAN, Bulletin of the New Zealand Society for Earthquake Engineering, Vol. 50, No. 3, pp. 394-435, New Zealand Society for Earthquake Engineering, 2017.9.
- 4) (URM) Tomomi Suzuki, Ho Choi, Yasushi Sanada, Yoshiaki Nakano, Kazuto Matsukawa, Devjyoti Paul, Polat Gulkan, Baris Binici: Experimental evaluation of the in-plane behaviour of masonry wall infilled RC frame, Bulletin of Earthquake Engineering, DOI 10.1007/s10518-017-0139-1, Springer, 2017.4.
  - 5) (津波) Yoshiaki Nakano: Structural Design Requirements for Tsunami Evacuation Buildings in Japan, SP-313 Proceedings of the First ACI & JCI Joint Seminar: Design of Concrete Structures Against Earthquake and Tsunami Damage (Editors: Kyuichi Maruyama and Andrew W. Taylor), pp. 1.1 - 1.11, American Concrete Institute, 2017.3.
  - 6) (URM) Kiwoong Jin, Ho Choi, and Yoshiaki Nakano: Experimental Study on Lateral Strength Evaluation of Unreinforced Masonry-Infilled RC Frame, Earthquake Spectra, Vol. 32, No. 3, pp. 1725-1747, Earthquake Engineering Research Institute, 2016.8.
  - 7) (被災度判定) 権淳日, 崔琬, 松川和人, 中埜良昭: 梁降伏型鉄筋コンクリート造多層架構実験に基づく建物の残存耐震性能評価, コンクリート工学年次論文集, Vol. 37, pp. 697-702 日本コンクリート工学会, 2015.7
  - 8) (津波) 監修/濱田正則, 編集/今村文彦, 岸井隆幸, 磯部雅彦, 堀宗朗, 分担執筆/中埜良昭: 耐津波学, pp. 64-80, 森北出版, 2015.9
  - 9) (CC 地震) 中埜良昭 (分担執筆): 2010年チリ・マウレ沖地震被害調査報告書/2011年ニュージーランド・クライストチャーチ地震被害調査報告書, (一社) 日本建築学会, 2012.9

#### 【所信】

この度、役員候補推薦委員会から本会会長候補者に推薦されたとの通知を受けました。大変名誉なことと感謝いたします。振り返ってみますと学生の頃に地震と建築の関係を学び始めてから30年以上が過ぎ、この間、国内外の被害地震の調査や復旧支援活動、防災・減災研究に携わり多くの経験を得てまいりました。特に日本地震工学会の会員になってからは、より幅広い分野の会員の方々との交流ができ、これを通じて学んだことは計り知れません。この意味からも本会のお役に立てることがあるならばと考へ、推薦をお受けすることといたしました。

地震防災対策には様々な視点からの議論と取り組みが必要であり、地震工学に関連する各分野が横断的に連携することの重要性は論を俟ちません。南海トラフの巨大地震や首都直下地震などの国難に直結する地震の発生が危惧される中、既存のディシプリンの深化に加え、急速かつ著しい進化と発展を見せる周辺技術を活用しつつ、さし迫った課題に対して、単なる研究成果の発信にとどまらず研究と実社会のギャップを乗り越えるまで研究成果を昇華し、実社会への実装までをターゲットとした取り組みが求められます。分野横断と連携を旨とする本会はこのに応えるべき、そして応えられる組織であり、これまで以上に社会との連携、出口戦略を意識した研究や活動に注力したいと考えます。

日本地震工学会は2001年の創立以降18年が経過しようとしています。人であればそろそろ大人の仲間入りです。上記のような国内の差し迫った脅威に加え、これからの成熟社会を見据えた地震防災に対する長期ビジョンとそのために比較的短期間で取り組むべき課題を、次世代を担う研究者・技術者・行政担当者らとともに本会としても本格的に議論すべき時期にきています。

また国内対応だけでなく世界に対する情報発信力の強化も重要な課題です。日本は防災・減災に対する優れた研究成果や技術を有していますが、これらはより積極的に世界に発信してゆくべきと考えます。その社会実装にはもちろんその国や地域に適したスパイスでカスタマイズするこ

とが必要で、これは必ずしも容易ではありませんが、その困難も克服しつつ日本のプレゼンスが世界に示すことができるような活動も極めて重要であろうと考えます。

2020年には17WCEEが仙台で開催されます。研究成果の世界発信とともに、次世代の課題とその解決を強く意識した議論ができるよう、ホスト学会として最大限に貢献したいと考えます。

もし会長に推挙されました場合はこのような思いを実現させるべく会員の皆さんの協力を得ながら尽力してまいりたいと考えています。